様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６７８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2024
課題番号：２０Ｋ０３４７２

研究課題名（和文）学生相談における心理面接評価法の開発

研究課題名（英文）Development of a College Counseling Assessment Scale for Evaluating Counseling Sessions

研究代表者
高橋　国法（Takahashi, Kuninori）

東京都市大学・共通教育部・教授

研究者番号：４０４２２１７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では学生相談カウンセラー(Co)がクライエント(Cl)の変化を評価する尺度開発を目的とした。アンケート調査と事例論文の質的メタ分析により、Coが注視する側面として主訴や症状、学生生活、Cl-Co関係、行動的変化（学習・就労・対人）と内面的変化（来談意欲・自己理解・情緒等）等が、さらにそれらを促す要因としてClの内的資源、言語化、Coの介入、Cl-Co関係の変化等が抽出された。以上の所見に基づき、学生が回答する「大学生活適応尺度」と「内面的変化尺度」を作成し、大学生を対象とする調査を実施して、因子的妥当性と概念的妥当性の確認を行なった。また、Coが面接後に記入するチェックリストを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本の学生相談が志向する学生の変化と成果が明確化され、臨床実践に基づく心理面接の評価項目が生成された。これまで、日本の学生相談においては心理面接を包括的に評価する尺度はなかったことを考えると、こうした研究成果が、その足掛かりとなることは学術的に意義がある。また、学生の変化や学生相談の成果を客観的方法で示すことが可能となり、学生相談の質的向上と学生支援体制の充実につながることも期待される。まだ試作段階であるが、実用化されることで、学生が現実的課題を心理的成長につなげる視点を持てるようになるための心理教育への活用や、学生相談以外の対人援助領域の評価方法の構築に役立つ可能性も考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study developed a scale for college counselors to assess client changes. Using a questionnaire and a qualitative meta‐analysis of case studies, counselors focused on presenting complaints and symptoms, college life, the Client-Counselor relationship, and psychological growth, extracting factors that promote behavioral changes (academic performance, employment, interpersonal relations) and internal changes (willingness to attend counseling, self-understanding, emotional regulation), such as clients' internal resources, verbalization, counselor interventions, and changes in the Client-Counselor relationship. Based on these findings, we created and validated a College Life Adaptation Scale (five factors: academic adjustment, career planning, interpersonal relations, family relations, health) and an Internal Change Scale (six factors: self-understanding, self-esteem, agency, broadened perspective, coping ability, emotional regulation), and produced a counselor-rated evaluation form.

研究分野：学生相談学、臨床心理学

キーワード：学生相談　心理的成長　心理面接の評価票　効果測定

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景
（１）高等教育機関における学生相談室の設置率は 9 割を超え、相談件数は年々増加している（岩田ら,2016)。扱われる相談内容は、一般的な修学上の問題から精神障害、発達障害、性的少数者が抱える問題など多岐にわたり、心理学的支援のニーズが高まるとともに、学生相談の取り組みの成果を検証し、実態と課題について情報発信することが求められている。

（２）学生相談活動の中核である心理面接について、アメリカでは大学組織や社会の要請に応えるべく、Outcome Questionnaire‐45（OQ‐45)や College Adjustment Scales(CAS)などを用いた効果研究がなされてきた。扱われる領域は尺度によって異なるが、主観的不快感、対人関係、社会的役割（OQ‐45）の状態や、不安、抑うつ、自殺企図、物質乱用（CAS）などについてクライエントの自己報告から効果を判定するものであり、概して不安などの精神健康状態や生活上の苦痛の程度を扱うものとなっている。一方、日本の学生相談機関における効果測定研究の多くはグループプログラムや授業を対象としている(設楽,2011;川崎ら,2016)。心理面接の成果を数量的に検討した研究は殆ど見当たらないが、近年、OQ-45 などの欧米で開発された尺度を邦訳して心理面接の評価を試みた報告がなされるようになった（田中ら,2016;慶野ら,2016)。
　しかし、日本の学生相談では、学業や大学生活への適応、対人関係、それぞれの個性や精神健康上の問題などの悩みを通して、様々な問題にその人らしく向き合い対処できるようになること、すなわち心理的成長を支えることが重視される。さらに、青年の自殺やひきこもりといった現代日本の問題が、心理的な成熟よりも環境への適応が優先される傾向から生じている可能性（齋藤,2013）を鑑みれば、大学生の心理的成長を促す働きかけの重要度は増しているものと考えられる。そのため、症状や苦痛の程度を主な測定対象とする従来の尺度のみでは、日本の学生相談の取り組みとその成果を十分に測定できない懸念がある(江上ら,2013)。

（３）また、日本の学生相談において、何を心理面接の成果として扱うべきか十分な議論がなされていないことも課題として残っている。したがって、日本の学生相談が心理面接で学生のどのような変化を志向し、心理面接の成果として何を評価するのかを明確化・具体化し、それに見合う評価法を新たに開発することが望まれる。また、従来の効果測定尺度は主にクライエントによる自己報告式である。しかし大学生活の様々なイベントに伴う内的な揺れ動きの最中にある学生の心理学的評価は、臨床的・発達的視点を備えたカウンセラーの方が客観的に捉えられる側面もあると考えられ、カウンセラーとクライエントの両者による評価を用いる測定尺度であることが望ましい。

２．研究の目的
（１）本研究では日本の学生相談が志向する心理面接の成果を適切に扱うことができる学生相談面接評価尺度（College Counseling Assessment Scale; CCAS）を作成することを目的とした。本尺度は、臨床実践からボトムアップ的に評価項目を生成し、カウンセラーによるチェックリストとクライエントによる自己報告尺度から構成される。

（２）本研究の学術的独自性は以下に集約できる：①日本の学生相談における心理面接が志向する学生の変化と成果が、臨床実践に基づく心理面接の評価項目により構成され、②学生相談の多様な相談内容に対応できる汎用性と現場で使いやすい簡便性を備えた尺度開発を目指すことにある。さらに、本研究の成果からは以下の発展可能性が期待できる：①学生相談の効果を様々な要因から検討・議論することが可能になり、学生相談の質的向上と学生支援体制の充実につながる、②カウンセラーによる心理面接の評価・改善に加え、学生が現実的課題を心理的成長につなげる視点を持てるようになるための心理教育に活用できる可能性がある、③学生相談以外の対人援助領域の評価方法の構築に役立つ知見となる。

３．研究の方法
（１）事例研究論文の質的メタ分析
　大学の学生相談機関において継続的に実施された心理面接で、2018 年から 2020 年に発行された「学生相談研究」 掲載の事例研究論文 13 編を分析対象とした。4 名の分析者による合議制をとり、各事例についての質的メタ分析を行った。分析手順は以下のとおりである：①論文中での Co の着目点を抽出、②文脈と意味を吟味し要約文作成、③類似した要約文をカテゴリー化、④各カテゴリーの意味・内容について定義づけ、⑤類似したカテゴリーをまとめ領域を生成、⑥意味・内容に共通性のあるカテゴリーを中カテゴリー化、⑦領域と中カテゴリーを使用して概念間の関係性を図式化し、関係性について分析を行った。

（２）学生相談カウンセラーのアンケート調査
　学生相談に携わるカウンセラーを対象に、2021 年 3 月から 6 月にかけて全国および関東地区

の学生相談に携わるカウンセラーが任意で登録しているメーリングリストを用いてオンラインによる無記名式アンケート調査を実施した。国内のカウンセラー 35 名から回答を得た（男性 9 名、女性 26 名；国公立大学 17 名、私立大学 18 名；心理臨床歴平均 18.9 年（*SD* = 7.88）；学生相談歴平均 14.1 年（*SD* = 8.35））。調査項目：心理面接の効果について、継続的な心理面接での効果や成果としての指標に関し自由記述で回答を求めた。また、心理的成長に関し、カウンセラーが具体的指標としていることを自由記述で、加えてその重要度について回答を求めた。回答データは、KJ 法を参考に類似した内容をまとめ小、中、大にカテゴリー化し分析を行った。

（３）学生用質問紙の検討

事例研究論文の質的メタ分析と学生相談カウンセラーのアンケート調査から得られた所見を基に、学生相談カウンセラーが重視する学修、就活・進路、対人関係、家族関係、健康状態、内面的変化を本尺度で扱う領域として設定し各領域で扱う概念を定義した。2022 年 10 月下旬から 11 月にかけて予備調査を実施し、質問項目数を絞り込み、計 28 項目を選定した。本調査を 2022 年 12 月中旬から 2023 年 1 月にかけて実施した。国立大学１校、私立大学１校，公立大学１校に在籍する 441 名から回答を得た(学部生 384 名、 大学院生 57 名；男性 276 名、女性 159 名、その他 6 名)。欠損値は分析ごとに除外した。収集したデータについて確証的因子分析を行うとともに、ENDCOREs（藤本・大坊,2007）などの既存の質問紙尺度を使用して構成概念妥当性を検討した。

４．研究成果

（１）カウンセラーの志向する成果と心理的成長

事例研究論文の質的メタ分析から、カウンセラーは心理面接を通し常にクライエントを観察し、クライエント理解を深め、面接方針や介入方法を模索し、悩みながら関わりを持っていることが確認された。事例研究論文の質的メタ分析を実施し、カウンセラーはクライエントの「見立て」と「変化」、そして変化が生じた際の「変化の要因」に着目していることが明らかとなった（毛利ら,2021；髙橋ら,2023）。

「見立て」に関しては 140 のカテゴリー、51 の中カテゴリー、13 の領域を生成し、学生相談カウンセラーが心理面接で注目している点が明らかとなった（表 1）。また、領域と中カテゴリーから、領域間、あるいは中カテゴリーと領域間との間に相互作用を想定することで、初回面接から面接方針を立てるまでのモデルを得ることができた。本研究ではまた、質的メタ分析により「クライエント－カウンセラー関係」が生成されたが、日本のこれまでの研究では、見立てといった場合、本項目を含めたうえで見立てを論じた研究は見当たらず、心理面接に影響を与えている本項目を含めた、包括的見立て、と位置づけられるモデル生成になったと考えられる（髙橋ら,2023）。

「変化」では 87 のカテゴリー、45 の中カテゴリー、11 の領域が生成され（表 2）、「変化の要因」では、25 のカテゴリー、4 の中カテゴリー、6 の領域が生成された（表 3）。カウンセラーはクライエントの内面的変化を重視し、そうした変化は変化の要因の組み合わせによって生じ、行動に表れる変化と内面的変化の相互作用のあることも示唆される結果となった。変化においても、「クライエント－カウンセラー関係」が「内面的変化」を生じさせる土台となる重要な役割を果たすことが示唆される結果となった。

表 1　見立て

領域	中カテゴリー数	カテゴリー数
主訴・来談経緯・来談意欲		3
臨床像	6	11
成育歴・生活歴	4	6
心理面の理解	6	21
学修	5	9
全般的適応		3
就職・進路	3	5
対人関係	7	13
家族関係	4	16
健康状態・疾患・障害	10	25
総合的理解		4
Cl-Co関係	3	15
面接方針	3	9

表 2　変化

領域	中カテゴリー数	カテゴリー数
来談状況・来談意欲	2	3
臨床像	2	2
語りの変化	2	4
内面的変化	9	19
行動の変化	5	7
学修	4	5
就職活動と就労	5	9
対人関係	6	11
家族関係	2	8
健康状態・疾患・障害	4	12
Cl-Co関係	4	7

表３　変化の要因

領域	中カテゴリー数	カテゴリー数
Clの内的資源		2
カウンセラーによる働きかけの効果	4	10
言語化や語りの効果		3
Cl-Co関係の変容		5
関係者との連携		3
外部資源や支援ツール活用の効果		2

また、学生相談カウンセラーを対象にしたアンケート調査では、学生の心理的成長について、22 の小カテゴリー、8 の中カテゴリー、3 の大カテゴリーが生成された（馬渕ら,2023）。大別すると、学生個人の変化、社会適応、面接場面での変化を心理的成長の指標としていることを確認した。

このような事例研究論文の質的メタ分析と学生相談カウンセラーのアンケート調査を基に、CCAS に設定する質問項目について研究者間で協議した。その結果、心理面接を評価する際に、カウンセラーとクライエントに尋ねる項目について、比較のために同じ事柄に関する項目と、それぞれ独自に評価する項目を設定するとの結論を得た。

（２）学生用質問紙尺度の作成

学生用質問紙尺度の作成にあたり、事例研究論文の質的メタ分析と学生相談カウンセラーへのアンケート調査結果を基に、学修、就活・進路、対人関係、家族関係、健康状態、内面的変化に関する概念の整理と定義付けを行い、それぞれを測定するための質問項目を作成した。その後、研究者所属の 2 大学の倫理審査を経て、大学生を対象とする質問紙調査を実施した。

学修から健康状態までは現実的適応状態に関する領域であるため「大学生活適応尺度」としてまとめた。因子的妥当性とモデルの適合度を高めるために項目の調整を行いながら確証的因子分析を行ない、最終的に計 21 項目から成るモデルを採用した（毛利ら,2023）。

内面的変化は「大学生活適応尺度」とは別の尺度として構成し、自己肯定感、視野の広がり、主体性、情緒の統制、対処能力、自己理解の 6 因子を想定した質問項目を準備した。大学生を対象とする調査を行い、因子的妥当性を確認した結果、6 因子 22 項目から成る「内面的変化尺度」を採用した（毛利ら,2023）。

（３）カウンセラー用チェックリストの作成と CCAS パイロット版の構成

カウンセラー用チェックリストとして、学生の基本情報（学生の所属、来談経路など）、学生の状態を評価する 8 領域 37 項目（学修、就職活動、対人関係、家族関係、健康状態、問題行動・自殺関連、心理的側面、面接場面での様子）、面接関係（8 項目）から構成される質問票を作成した。また、クライエント学生が回答する面接関係に関する質問項目も同時に作成した。そして、学生用質問紙尺度（「大学生活適応尺度」と「内面的変化尺度」）と併せて、CCAS パイロット版を構成した。

（４）未達事項と理由

当初の研究計画では、本研究助成期間中に学生相談カウンセラーとクライエント学生を対象とした調査を実施する予定であった。しかし、各大学での倫理審査に予想以上の期間を要したため、研究期間内には実施できなかった。

（５）展望

今後、本研究で作成したパイロット版を用いた調査を進め、CCAS の完成を目指す。研究者が所属する５大学の倫理審査はすでに完了しているため、以下の工程で研究を継続する。

① CCAS パイロット版によるデータの収集
② カウンセラー用チェックリストの実用化の評価
③ 学生用質問紙（学生生活適応尺度と内的変化の評価尺度）の再検証
④ 学会発表および学術誌投稿による公表

これらを通じて、CCAS は日本の学生相談の実践的評価ツールとして社会実装され得るものと考える。研究成果は、高等教育機関のステークホルダーへ学生相談の有効性を伝える有力な言語的枠組みを提供し、学生支援体制の質的向上に寄与することが期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 馬渕 麻由子，江上 奈美子，毛利 眞紀，今江 秀和，藤岡 大輔，髙橋 国法	４．巻 44
２．論文標題 学生相談カウンセラーのとらえる心理面接の効果と心理的成長	５．発行年 2023年
３．雑誌名 学生相談研究	６．最初と最後の頁 32，42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57289/jasc.44.1_32	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 毛利眞紀、藤岡大輔、今江秀和、髙橋国法、馬渕麻由子、江上奈美子、齋藤暢一朗	４．巻 59
２．論文標題 学生相談面接における見立てとクライエントの変化：４つの事例研究のメタ分析を通して	５．発行年 2022年
３．雑誌名 CAMPUS HEALTH	６．最初と最後の頁 315-317
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 毛利眞紀;髙橋国法;今江秀和;藤岡大輔;馬渕麻由子
２．発表標題 学生相談で活用する大学生活適応状況を測定する尺度の作成
３．学会等名 第61回全国大学保健管理研究集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 毛利眞紀;髙橋国法;今江秀和;藤岡大輔;馬渕麻由子
２．発表標題 学生相談面接を通した学生の内面的変化を測定する尺度作成の試み
３．学会等名 日本心理臨床学会第42回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 髙橋国法;毛利眞紀;藤岡大輔;今江秀和;馬渕麻由子;江上奈美子
２．発表標題 学生相談カウンセラーは心理面接で何に注目しているのか：事例研究論文の質的メタ分析による検討
３．学会等名 日本学生相談学会第41回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 毛利眞紀（創価大学）・藤岡大輔（北海道大学）・今江秀和（広島市立大学）・髙橋国法（東京都市大学）・馬渕麻由子（東京農工大学）・江上奈美子（東京農工大学）・齋藤暢一朗（北海道教育大学）
２．発表標題 学生相談面接における見立てとクライエントの変化：４つの事例研究のメタ分析を通して
３．学会等名 第59回全国大学保健管理研究集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 土屋明子、髙橋国法
２．発表標題 留年を繰り返した発達障害を持つ学生との面接過程
３．学会等名 日本学生相談学会第38回大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	毛利　眞紀 (Mohri Maki) (50787281)	創価大学・教育学部・准教授 (32690)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	馬渕　麻由子 (Mabuchi Mayuko) (90772682)	東京農工大学・学内共同利用施設等・准教授 (12605)	
研究分担者	江上　奈美子 (Egami Namiko) (80708793)	東京農工大学・学内共同利用施設等・講師 (12605)	
研究分担者	齋藤　暢一朗 (Saito Choichiro) (90722091)	北海道教育大学・大学院教育学研究科・准教授 (10102)	
研究分担者	藤岡　大輔 (Fujioka Daisuke) (00812380)	北海道大学・学生相談総合センター・講師 (10101)	
研究分担者	今江　秀和 (Imae Hidekazu) (00736358)	広島市立大学・国際学部・准教授 (25403)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関